

## 「安倍政権へレッドカードを」

2015年01月19日

東京駅までJRで1時間くらいだが、目指す所までは1時間30分はかかり、遠く感じるようになった。東京に行く時は、2、3の用事を兼ねて行っている。一昨日、3つの目的を持って上京した。

一つは、東京都美術館に「九条美術の会」に加わっている人々の絵画、彫刻、オブジェなどを展示した「九条美術展 守ろう 生かそう 憲法九条」を観に行った。9条に関わる戦争や平和や不穏な現代を写し取ったものが多かったが、日頃の何気ない絵画もあった。美学・美術批評家の北野輝氏が「九条は先進的模範」と題して「『9条壊し(怖し)』の安倍首相らは、憲法9条ではなくマララさんら2人のノーベル平和賞の受賞を聞いてほっとしたことだろう。表現の自由を守り、芸術家としての創意を發揮して、9条こわしの閣議決定を無効にし、『戦争する国づくり』にストップをかけよう。わが9条こそ地上に戦火をなくすための先進的な規範となることを世界も知りつつある」と書いていた。「無言館」の窪島誠一郎氏などからも、激励の言葉が寄せられていた。9条を守ろうとする人々があらゆる分野で声をあげているが、芸術家たちの平和への熱意が伝わる美術展であった。

二つ目の目的は「1・17国会ヒューマンチェーン 女の平和」に参加することであった。「女の平和」実行委員会が赤のファッションを身に着けて国会を包囲する「人間の鎖」の抗議運動を呼びかけた。妻がぜひ参加したいと言い、男も参加できるということで、妻のお供をした。国会の周りは、赤いものを工夫して身に着けた女性たちで埋め尽くされた。赤は平和を象徴し、安倍政権への「レッドカード」を突きつける意味を持たせたのである。妻は赤い帽子をかぶり、私は赤いショルダーバッグを持って、折り紙の赤いハートをもらい帽子につけた。鎖は一重でなく、二重の所もあり、華やかで楽しい抗議運動であった。時々、手をつないで「女たちは、人を殺し合うのは嫌です！ 差別をなくし自由を守り育てます！ この国の主権者は私たちです！」とシュプレヒコールをした。国会の正面に小さなステージが設けられ、音楽評論家の湯川れい子氏、作家の澤地久枝氏、雨宮処凛氏、講談師の神田香織氏などが交代で力強いスピーチをした。女性たちのパワーに圧倒される盛り上がりであった。このような集会には、必ずと言っていいほど右翼が街宣車で来て、大音量のスピーカーで妨害するが、一台も来なかった。珍しいことである。

「9条守れ」の運動は多彩な広がりを持ち、地道に展開されているが、安倍政権には届かないことが残念でならない。

三つ目は、映画「サン オブ ゴッド」を観るためであった。クリストファー・スペンサー監督が米ヒストリーチャンネルで放映したものが評判になり、映画化したという。主イエスの誕生から復活までを、四つの福音書から映像化している。福音書は簡潔に書かれているので、想像は膨らみ、解釈も多様になる。権力に対峙する姿が力説されていた。今日の聖書学では当然とされているが、米国人には新しい視点なのであろうか。主イエス役はとてもハンサムであった。かつては、主イエス役の顔は映さないとされていたが、今では全てを映すようになった。ペトロの不甲斐なさ、律法学者たちの頑迷さ、ピラトの優柔不断さはよく描かれていた。十字架につけられるシーンは、映画「パッション」の残酷さとは違うリアリティーがあった。隣の席の人は泣いていた。しかし、聖書を知らない日本人には、奇妙な物語に映るのではないだろうか。

東京を忙しく巡り歩き、最後に、久しぶりに外食を楽しんだ。